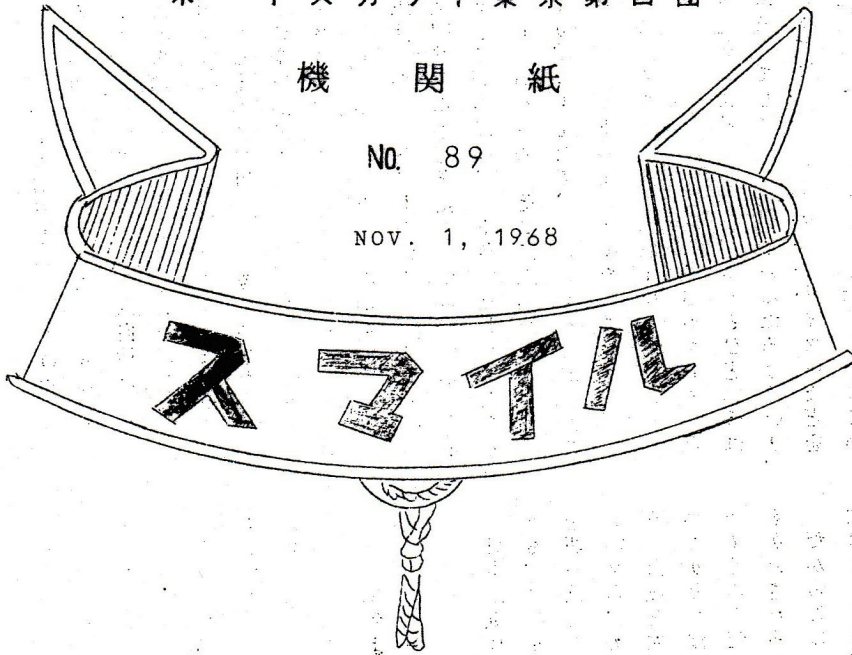


ボーイスカウト東京第四団

機 関 紙

No. 89

NOV. 1, 1968



スカウト活動の変革

副団委員長 杉原 正

四団という温室のなかで永く育てられたものは、良いにつけ、悪いにつけ、有形、無形の影響をうけています。

伝統の上にあぐらをかく……の表現がピッタリするのが四団のスカウト活動ではないでしょうか。伝統という美しい言葉の響きのもとでヌクヌクと育ち、自らを切磋琢磨する気概と勇氣、そして若さが失われてしまったような気がします。

鑄型のなかでの固定した考え方や行動、ともすると独善的になる傾向が非常に強いように感じます。永く続いたことだけで正当化したり、それが正しいと錯覚し続け、他から学ぶ態度の少なかつた私たち、とるに足りない経験や知識をもってスカウティングをいかにも知っているかのような高慢な態度がなかったとはいえません。もし四団の低迷があったとしたら、謙虚さに欠けていたことから生じたものだと思えます。

本質を探究する態度がオーで、経験、体験主義から割り出したスカウティングは、本質の上に積み重ねていかなければならないものです。

独りよがりのスカウティングを反省し、大きな視野にたつてすすみたいものです。スカウティングの理念は変わってはいけません。しかし実社会に生きるスカウティングは自ずから変革していかなければ、広く受け入れられることはないでしょう。そのためには、ルック、ワイド。まず指導者自身が率先すべきでしょう。

自分の一番大切なもの。それは世界の人の一番大切なものでもあるかもしれない。いや、きっとそうだ。それは自然だろう。

もし自然の太陽のかがやきが消えたら、草木はもちろん私達まで死んでしまうだろう。もし草木がこの世界から姿を消したら世界中の空気がにごうてしまうだろう。また、

メネズミの大ききのワシやタカがいなくなったらノネズミはどんどんふえて、人間の生活をがいするにちがいない。でも人間の文明はどんどん発つして人口がふえ……

そしてついに、木や草をたおし、山をくずし、海をうめ、そこに人間たちは町をつくり、ビルをたて、そしてとの山の土はコンクリートの下じきになってしまふ。そんなことで山からおわれたキツネもいるだろう。つかまえられてころされてしまった鳥もいるだろう。いや、もっとひどいのは

ほろびてしまったものもあるだろう。いま、日本ではトキとかコウノトリやツルなどを必死でほごしている。もうほろびかけている鳥だ。これも前に書いたようなことへ

ってしまつたのだろう。人間が自然を大事にしない心一つで、い

またくさんいるスズメやカラスも、トキやコウノトリと同じような立場の鳥になつてしまふにちがいない。もし川にダムを作ると、アユはそれいじょう川をのぼれなくなり、その川にはアユはいなくなる。そうなら楽しいアユつりもできなくなるだろう。でも魚道を作つてやれば、そのアユは毎年この川にきて、そしてアユつりも楽しめるだろう。

考えよう
「一番大事なものの」

日本は森林にめぐまれている国だ。けれども、森林を大事にはしていない。もし木を切つたとき、切つた所をそのままにしておいたら、そこは大水の原因になるだろう。自然を大事にすることは、利えきは自然ばかりではなく、人間の方にも行きわたつてくるのだ。自然をあらすと人間の生活もがいされるのだ。

だからこの世界で、ぼくが、他の人々が大事なものは、やっぱり自然だろう。

貴方の一番大切なことは何？と聞かれたら私は、人間なら誰れでもが極限状態でも、「生きる」というハードな心を持つ事。もう一つは、小学生の頃から書いている詩のNOTEを見る事。

私の「生きる」という定義は、ある程度の生活を送る事が出来、そして、自分自身の体に異状がない事を、私は「生きる」と云っています。小さい頃から病気や傷で、何度死の線を彷徨つたことか分りません。これからの人生を、健康な体で暮らす事が今の私の願いです。もう一つ、思つた事を書いたNOTEから一つだけここに書きましたので、読んでいただき、意味が分つた人がどんなに死に近いかをお伝えして、ペンを置きます。

「過去のある六ヶ月分の
フレイズの集団」

茶色のビロード張りの人形
雨ざらしになつてゐる赤い金魚
と白い椅子

襖まで積み上げてある本

黄色い開き窓からのバラの香り

近所の二階屋根に休んでいる親子雀

淡い天井の隅にある外国ポスター

煙草とマッチで一杯にされた灰皿

雨水を踏んで走るダンブカー

満天の星の中の十五夜の月が

鳴いている

深夜のジャズ放送

濡を離れて地球に激突ける流れ星

カレンターが破られたあとの朝日

机の上の貝殻は赤い赤い

口笛が歌の旋律を走る

数千の微虫が水銀灯に当る非調

座蒲団に重り合っている320円

黒の鉛筆が北を向いて横たわっている

Birthday Dollがいつまでも微笑む

ゾロ目のサイコロが白紙の

NOTEに立っている

満開の桜に向って造花が怒っている

正午の薄い月が深夜の

あつぽったい月に挨拶をする

頭に残るIdealistの絶叫

哀楽の激しい彼奴に二年後に会う

青紫色をした底なしの地獄

曲げられた毛布がベットから顔を出す

一人で生きて行く事にあきた

女性が八人

全霊が心を引摺って行く

も の 申 す

小年隊副長補 河 辺 章 夫

最近、海上訓練だの、その他東連の行事にでて、感じたことだけれど、四団の存在が薄くなってきたみたいだ、感じられ、ちょっと、さびしく思えました。古くから活動している人が、やめてしまったり、限存の隊の活動に直接参加をしていないせいもあるかも知れません。そして、僕達の隊は、若いリーダーをむかえ、大いに若返って、いろいろな面でも軌道に乗ってきました。各隊の集会を、見ていきましたが、変化にあっていて、なかなか、面白そうに活動していたり、自分達の隊、班をよくしようとして、各々の人がよく努力をしていると、感じられます。内部からは、このように努力しているのに対し、外部で活やくしている人が、あまりにも、少ないのではないかと

思います。

この間の、銀座祭の奉仕でも、隊員から「なぜ、四団として参加できないで、他の隊の指導下に入ってしまうのですか？」といわれ、なだめるのに困ってしまっただが、いくら少人数で参加しても、昔、四団だった人が、その行事等に責任者としていれば、なにかと、よくめんどろを見てくれるのではないかと思ひ残念でした。そこで、僕は、これを読んでくれた人に、もっと広い目をもって、行事、訓練等に多めに参加して四団の名を高めてもらいたいと思います。

クリスマス

合同 礼 拝 は

十二月十四日

三時三〇分

からです

父兄雑感

八代 珠子

早いもので、上の子が入団してから、もう一年経ってしまふ、二人の腕白坊主が、いそいそと土曜日の来るのを待ちかねて、集会に通っている。始めの一年は親も新入生の如き気持で、何が何やら解らぬままに過ぎてしまい、やっと此の頃、少しは客観的な目で子供達の周囲を見廻せられるようになって来たような気がする。

近頃新聞の社会面を賑わしている学生運動について、スカウトの親としてしみじみ考えさせられている。運動そのものは是非はさておき、果してあの学生達の内の何パーセントが、自分の考えに基づいて行動しているであろうか。大勢の流れの中に身を置き、唯何となくそうしなければならぬような気がして、押し流されて行っているのではないか。若し、そうだとしたら、何の為に学問はあるのだろうか。今迄に学んだものを基にした自分の信念の中で納得の行く迄考え、その結果の行動ならば、どんな事をして良いと思うし、このような事態にはならなかつたと思ふ。

私は、子供達が、スカウト活動の中で、各自の責任に於いて考え、削り出して行く事に大きな意義を感じている。このような世の中であるから、猶一層スカウト活動の必要性を感じさせられて、二人の子供達も良きリーダーの方々の御指導の下に、よりよいスカウトとして、育って欲しいと願っている。

(年少隊父兄)

僕は今

年長隊 平井 幸彦

うな事を言っているのは、小学生ではなく義務教育を三年以上前に終つたはずの人々であるとは、嘆かわしいの一言につきる。何故に、何人が、彼らをこのような愚人にしてしまったのかを僕は、今考えているのである。

僕が思うにはその原因は、この社会にあると思う。それも現行の受験制度と学歴尊重主義にあると思う。それは、彼らが大学を受験する際に、本当に興味があり、将来自分の天分を伸しうる学部を選ばず、大多数は、「見え」で、産業界に多く卒業者を出しているとかいうオ二義的理由から、某大学の学部を選ぶからだろう。こういう人が、いざ大学に入学したとしたらどうだろう。「自分は、一体何をしたらいいんだろう」と考える人が多くできるだろう。彼らは、大学に卒業証書を得るためののみ入学したのだから、いざ入学したところで勉学の目的をもたない。そこで暇ができる。そうすると必然的に、麻雀ぐるいの大学生や、学生運動で自分のイライラを解消させる大学生が、自然発生するのではないかと思う。だから佐藤君(総理)も、学生運動を圧力だけで排除するのでなく、もっと根本的なものからやり直す必要があるのでは

ないか。

今後のカブスカウト活動の方向

一新カブブックを使って
カブ委員会委員 杉原 正

一九七一年、富士山麓朝霧高原でオ一三回世界ジャンポリーが開催されます。

日本のスカウト人口、約十五万。この世界ジャンポリーまでに二倍の三十万にしたという倍増計画を日本連盟ではたてています。

都市周辺には、スカウト希望者（小学校低学年）は多勢あり、安易に考えて希望者を入隊させれば数の上では目標を達成できるでしょう。しかし、実状ではカブ一〇〇に対し、ローバターの割合のスカウト人口の構成です。継続しないで途中で脱落していくものが、かなりの数にのぼっています。団でもシニア隊までで、ローバ隊があっても親睦団体の濃いグループであって本来のスカウティングには程遠いものになっています。

指導者がいない、プログラムがないとい

った種々の理由はあつてでしょう。しかし、問題はスカウト自身のやる気でしよう。

カブ、ポリイ、シニア、そしてローバと情性できてしまつたらこの問題は、いつ迄たつても解決しないと思います。

極言すれば、やる気のない、問題意識すらもない（何のためにスカウティングを続けているか）、目標のないローバを私達が、もし、育てていたら、スカウティングは、その理念から遠くかけ離れたものになつてしまつてしよう。

スカウティングは、息のながい活動です。スカウトになつたら、すぐ良くなることを両親が期待し、指導者が、もしそれに迎合するようだったら、すぐにお互に挫折することになるでしょう。継続して意味があり、成果のある活動を大事に育成したいと願っています。

スカウティングの評価は、社会に貢献する人間をどれだけ育てたかによります。

「初め良きこと なかば良し」

終り良きこと すべて良し」

すべてが良かったことを表示できるよう努力したいものです。終り良きことのためには、そのスタートが肝心です。このスタートの時期を充実する為にかブ委員会が日本連盟に設置され、今後のカブの動向の指針を検討し、具体化しているわけです。そのオ一の成果が、新しいカブブックと進歩制度の改革になつたのです。

拜啓 B S 殿

G S リーダー

山崎 光

四団に入つて三年目、やっと周囲にも目を向ける余裕が出て来た私は、一つの問題にぶつかりました。技術的にはすぐれたスカウトがいるにもかかわらず、スカウト精神に対してはどうかという事です。恵まれ過ぎてあまり苦労らしき苦労もない四団に情を置いていた私達は、今の状態にあまりにも甘え過ぎているのではないでしようか？。それがゆえに、自分の事しか考えず、相手の立場になり、考えれば出来ないような事でも、何の疑問も持たずに実行してしまふ。話合いにおいても言い方が違つただけで、結果的には同意見であるにもかかわらず相手を理解しようともせずに議論しあつているつもりでいたりするのでないでしようか？。これではスカウト活動に参加してない人達と比べてただたんに制服やバッヂをつけた外面的においての違いだけで、内面的には少しもかわりない人間が出来上がつてしまつていゝのではないでしようか？私達はこの事を責任を持って考えなければいけない事と思います。

山中実修所入所記

年小隊副長補 片岡 孝

年少隊副長と、十月九日(水)十四日(月)まで五泊六日の日程で山中野営所で開催された東京連盟年少部八期山中実修場に参加した。往きの電車で以前四団にあつたジースカウトに屬していた高柳さんをはじめ、山中実修所に参加する数名と一緒に、御殿場に近づくとしたがつて、冷気が増し半ズボンがこたえてきた。実修場の門を不安いっばいでくぐり抜けたとたん五日間何を食べても無事なようにと薬を飲まされた上、持物を一つ一つチェックされ、不必要と思われる物は取り上げられてしまい、「帰りたくなつた」という人が沢山いた。「道心堅固」の碑の前で七〇才近い山口所長がぬつと仙人のように現われ、全員に入所の固い決意を問われた。

ここに富士一隊が発足し、隊長は四団の副団委員長の杉原さんだった。正直なところ、杉原さんの顔を見たとき、不安が少し和らいだ。入所者は四組に分けられ、僕は一組に、里見さんは三組に入った。

ポトイスカウトとして、設営、野外科理

等をしたたり、カブスカウトとして、隊、組集会や、ゲーム、劇等に参加したり、カブブックの修得課題や選択課題に挑戦し、指導者として講義をうけるといふ一人三役で目のまわるようなプログラムを消化していった。朝六時の起床で一日が始まり二時間で朝食を作って終らせて点検。一分の狂いもなくスタダブ一同がかげ足でやってくる。十度以下という寒い小雨の中でも、半袖半ズボンで朝礼が始まる。これが終るとすぐ午前中の講義。隊、団運営、プログラム、リーダーのあり方等についてであった。十一時から一時まで昼食。この後再び午後の講義が五時まで、夕暮れの中を夕食準備。連日の雨で薪は燃えにくく夕食にありつけない組もあったほど。七時から九時までの夜の講義だけが屋根の下で行なわれ、暖炉の暖かさが一日の疲れから眠りをさそつた。暗い山道をおりて、サイトに帰り、残された作業をし、点検準備をすると、もう消灯の十時。これが一日のプログラムであった。最終日の朝五時半、スタダブの各団にたき起され、赤富士を見に富士見台まで駆け上つた。雄大な富士を全日程を通じて始めて見る事が出来た。今日一日で終了だといふ喜びが感激を一層増した。無事に全員

修了証を授与された時には、感激のあまり不覚にも涙がこぼれた。 合 同
何か事が終る時によく云われるように、「これからが発だ」と僕もこの修了証を手にしたその時に思わずいられたかった。リーダーとしての自覚と闘志、困難と新しい不安をしょって出発の準備が出来たのだ。

ありがとう美藤先生!

「よっしゃ やつたるでえ!」

開西弁でまくしたてる威勢のいいオッサンにおめにかかれなくなって、さびしい限りです。教会のお仕事でお忙しい中をスカウトのためにいろいろありがとうございました。BSの副団委員長としての年中の赤字財政の悩みと、GSのキャンプの設備としての喜び。いかなる事でも納得のゆくまで迫ってくるバイタリティ。到底一致しそりにない議論へ燃やすファイトというか、意地張りというか。この辺にこそ、先生の魅力があると思ひのです。スカウト活動への深い関心と理解、率直なご意見から、無気力のこわさ、私達自身がこの活動の中で考えねばならない事をいくつか置いていっ

て下さいました。先生への期待と不思議、牧界での、まことに人間くさい牧師としての活躍と紙くずが山積だった先生の部屋からよく火事が出なかったものだという事。お幸せをお祈りします。

報告

|| 団委員会 || 九月二八日 出席者一五名

- 一、各隊キャンプ報告 各隊々長
- 一、カブ組織の問題点について

杉原副団委員長

スカウト活動を一つの教育の場として考える上で家庭教育のあり方と共に再確認の時期である。特に両親の積極的参加によって自主的にやる意欲をわかせる魅力あるプログラムを指導者と共に運営分担するカブスカウト教育について改正されつつある連盟の方針についての説明。

一、賛助会員増員の件 宇田川団委員長

|| 団会議 || 一〇月一二日 出席者一〇名

- 一、各隊行事報告

|| バザー || 一〇月二六日

皆様のご協力で盛会のうちに終ることが出来ました。ありがとうございました。

|| 合同リーダー会 || 一〇月二六日

今後の行事予定に関する討議

出席GS、BS各七名

|| 合同リーダー研修会 || 一二月二日

飯、斎藤両牧師を迎え六時半より一時半まで行なわれた。飯牧師による、スカウト活動に於ける宗教教育に関する発題講演の後、「神と国」とについての分団協議が行なわれた。二七名

人事往来

おめでとろ!

美藤章先生(伝道師、副団委員長)は、5月11日(月)に、かねてご婚約中の斎藤基子さんと教会で結婚式を挙げられます。先生は一〇月末日を以って霊南坂教会を退任され現在は中目黒教会の牧師になられました。

お見舞

田中正男団委員長は風邪をこじらせて、もっかご静養中です。

○河辺章夫年長隊々員は九月より少年隊副長補に就任しました。

○里見年少隊副長、片岡副長補はオ八期山中実修所で杉原副団委員長の隊長のもとで五泊六日の実修を修了しました。

編集後記

小さなスカウト、中くらいなスカウト、大きなスカウト毎週皆元気で忙しそうに動いている。それぞれのプログラムを太い楽しんでもらいたい。各隊長間もうまくやっているようだし、やっと四団も本来の姿にもどって前進しつつあるようで何とも喜ぶこぼしい。時たま大きなスカウトに、オカシな服にネッカチーフを下げて背中を丸くしている人を見かけるが、スカウトはキチンと制服で参加してほしいし、又その方がずっとスマートだと思いがどうだろう。これからやってくる冬……そして楽しく忙しいクリスマススの準備に丈夫な身体でがんばってもらいたい。(ナベ)

出たり出なかつたりのスマイルにも、毎年クリスマス特集があったのに、今年は今月号が最後です。ご協力ありがとうございました。企画の貧しさから機関紙としての役目を十分にはたせなかつた事をお詫びします。スカウトとリーダーとご父兄と、実に幅広い青年層の交流の場としてのスマイルにもしてゆきたいと思えます。くる年も、何卒恐迫的原稿依頼にご協力をお願いします。(ハギ)

スマイル

発行日 昭和四十三年十一月一日

発行人 田中正男

編集人 杉原正

発行所 港区赤坂一―三―六

日本ボーイスカウト東京四団